人生100年時代を支える

住まい環境整備モデル事業

令和４年度　事業者交流会

開催日時	令和5年3月13日(月)13:30～15:30
開催方法	ZOOMによるオンライン開催

プログラム（敬称略）	**頁番号**
1. 開会	2
(1)挨拶　上森　康幹　（国土交通省　住宅局　安心居住推進課　課長）	2
(2)挨拶　髙橋　紘士　（住まい環境整備モデル事業　評価委員会　委員長）	2
2. シンポジウム	3
(1)事業の実施報告	3
①入居者自宅のシェアハウス化支援付き生活支援サービス施設 株式会社ハピネスランズ（令和元年度・課題設定型）	3
②小野路宿メディカル・ヴィレッジ 一般財団法人ひふみ会（令和元年度・課題設定型）	4
③困難を抱える女性が安心して暮らせる六甲ウィメンズハウス事業 認定 NPO 法人 女性と子ども支援センター ウィメンズネット・こうべ （令和3年度・事業育成型／令和4年度・事業者提案型）	5
(2)クロストーク　コーディネーター　三浦　研（評価委員会　委員）	6
①　話題提供～クロストークの補助線として　山田あすか（評価委員会　委員）	7
②　クロストークで議論したい2つのテーマ	10
③本日のまとめにかえて	13
3. 閉会	14

参加者	選定事業者	27 事業者 ・住まい環境整備モデル事業採択事業者：25 事業者 ・スマートウェルネス住宅等推進モデル事業・高齢者等居住安定化モデル事業採択事業者：2事業者
	評価委員（敬称略）	髙橋　紘士（評価委員長 ・ 東京通信大学　名誉教授） 三浦　研（評価委員 ・ 京都大学大学院　工学研究科　建築学専攻　教授） 山田　あすか（評価委員 ・ 東京電機大学　未来科学部　建築学科　教授）
主催	国土交通省住宅局安心居住推進課／住まい環境整備モデル事業評価事務局	

1．開会

(1)挨拶　上森　康幹　（国土交通省 住宅局 安心居住推進課 課長）

「人生 100 年時代を支える住まい環境整備モデル事業」は、前身事業を含め、今年度で 14 年目となります。これまで数多くの事業を採択し、他の事業の範となるような事業も多く出てきており、評価委員会の皆様をはじめとする関係者のご尽力に改めて御礼を申し上げます。

事業者交流会は、令和 2 年度から実施する取組みで、事業の実施やその遂行にあたって、先導性や実現性のヒントを得ていただき、事業効果を高めることを目的としています。

また、本日は学識経験者の皆様方からのアドバイスを得る機会であるとともに、過年度の採択事業者様から事業の途中経過やその成果等を意見交換する場ともなっており、参加の皆様においても改善点の認識や積極的な取組の促進に寄与することを期待しているところです。

(2)挨拶　髙橋　紘士　（住まい環境整備モデル事業　評価委員会 委員長）

本モデル事業は現在の事業の前身も含めて、毎年多数の応募をいただいてきました。審査の過程でも、私たちにとって大変発見の多い事業です。本日ご参加の皆様はもちろんのこと、様々な団体の皆様が、それぞれの現場を大事にしながら、住まいとその環境をどういうふうに変えていこうか、そういうことにチャレンジしていただいております。

本日はこれまでの採択事業の中から、先行している事業、個性的な事業として 3 つのプロジェクトをご報告いただくわけですが、単なる国土交通省の補助事業という枠にとどまらずに、広く社会的に広報され、理解され、色々な示唆を社会に与えてくれる、いずれもオリジナリティのあるアイデアの塊みたいなプロジェクトです。

国土交通省では、選定された事業をホームページ等で公開していますが、益々社会的にこれらの成果の普及をお願いしたいと思っています。そして、本日の報告も事業者だけに共有されるのではなくて、モデル事業の意義を共有しながら、広く社会的な知恵にしていただけることを願ってやみません。

2. シンポジウム

(1)事業の実施報告

①入居者自宅のシェアハウス化支援付き生活支援サービス施設

（代表提案者：株式会社ハピネスランズ／令和元年度・課題設定型　選定事業）

発表者　伊藤　敬子（代表提案者：株式会社ハピネスランズ　代表取締役）

●提案事業の概要

我が国では高齢化が進展するが、高齢者が安心・安全に住み続けることが難しいのが実情である。一方、若年の子育て世帯、特にひとり親世帯においては、都心部では高額な家賃相場のため、低廉な住まいの確保が課題である。本提案は、シェアハウスを運営する事業者が、高齢者の所有する戸建て住宅の空き部屋を、子育て世帯向けのシェアハウスに改修することで、自宅を所有したまま資金を確保し、都心部で低廉な住宅を提供するものである。シングルマザーは、軽微な生活サポートを行うことで家賃を軽減するなど、多様な世帯がそれぞれのライフステージに応じた入居ニーズを満たせる社会の確立を目指している。

●事業実施報告のポイント

◇取組の背景・提案内容

○老々介護、介護離職、ひとり親、世帯の増加、子供の貧困、空き家増加等の日本の社会問題は、多世代ホームで解決するのでは。

＊A 棟）高齢者4～5人（上限）＋住み込みスタッフ1人
　B 棟）母子家庭　2～3組

○多世代ホームのメリット

＊高齢者側／ひとり親・若者側／運営側

○サービスの提供・利用状況

○オーナーズテラスの仕組み

＊自宅をリフォームして収益物件化の提案
＊運営体制／建物構成

↑事業実施報告のスライドはこちらをクリックして閲覧してください。

◇取組の成果、今後期待される効果

○利用者の満足度も高く確実にいくつもの社会問題を解決できる仕組みを構築できた。

＊介護付き有料老人ホーム入居とオーナーズテラスの場合の比較

○問題解決のための対策

＊利用人数／スタッフの待遇／クラウドファンディング／消費者教育／ペアレンティング教育／協調性

◇今後の取組みの方向

○多世代暮しで日本が幸せに！　温かなコミュニティで大人もこどもも独りぼっちにならない暮らしを！

●質疑応答概略

○近隣のお付き合いなどは、どのような形で工夫されていますか。

☞地域性もあると思いますが、沿線でアパート経営されている大家さんが多く住んでいるような地域ということもあり、閑静な住宅街ですが非常に意識が高く、施設 Open の事前説明の時から多くの賛同を頂きました。毎月1回開く認知症カフェでは、近隣の方にも応援していただいて、老人会の方とかも遊びに来られます。そして包括さんも必ず毎月 1 回は来られます。広告とか一切していませんが、少しずつじわじわと、口コミで入居者さんが集まっている状況です。ただ一方で、不登校のような状態になってしまった高校生がいた時に、その高校の先生との関係で、シングルマザーの世帯が転居されたことがありました。その時には近隣の学校や保育園などに出向いて、取組みや今後の連携について理解していただくための努力は惜しまず行ってきています。

②小野路宿メディカル・ヴィレッジ

（代表提案者：一般財団法人ひふみ会／令和元年度・課題設定型　選定事業）

発表者　藤井 雅巳（一般財団法人ひふみ会　代表理事）

●提案事業の概要

東京町田市の小野路町は、里山景観等の自然環境が残るが、市内でも特に高齢化が進む地域である。本提案は、地域の医療機関が中心となり、里山地域の中心地に立地する古民家を取得し、メディカル・ヴィレッジ（カフェ、訪問看護ステーション、集いの場、蔵など）に改修するものである。地域の課題に対し、医療・福祉事業者とともに、地域住民を巻き込みながら、複数の事業を「ごちゃまぜ」に展開し、地域住民の誘引、コミュニティのつながりを生むことで、地域全体の健康指標の改善、自然・文化の継承、持続可能な地域社会の創出を目指している。

●事業実施報告のポイント

◇取組の背景・提案内容

○まちだ丘の上病院の地元・町田市小野路町の社会的な課題は、日本の地方の課題そのもの

＊超高齢化社会／社会インフラの断絶／自然・文化の継承／ソーシャル・フレイル

○古民家（3棟）を改修・活用した工夫について

○施設の運営・利用状況について

＊運営体制／イベント事例／複数の事業を複合的に解決するスキーム「ごちゃまぜ型」で実施

↑事業実施報告のスライドはこちらをクリックして閲覧してください。

◇取組の成果、今後期待される効果

○地域資源を掘り起こし、それらが活動するきっかけを提供し、そのつなぎ役のような役割を担っている。

○未想定であった、あるいは想定以上に解決が困難な課題

＊閉鎖的な地域との境界線の存在／ボランタリーな力（互助）を生かすための仕組み／エネルギーを持つ地域資源

◇今後の取組みの方向

○定量的なデータを活用した取り組みの効果を検証

＊多様な世代間の交流／地域資源の有効活用／地域の健康指標改善／多様な働き方の創出

○地域にとっての「ヨリドコロ」となり、「あるといいな」があるところ

●質疑応答概略

○病院がこのような活動を行うようになった経緯について、補足していただけますか。

☞もともとボランティアのような活動が施設になり、そこに医療が併設され、財団法人というオーナーシップが実質個人に紐づかない組織形態です。障害の分野に特化していた病院を存続させられないとなった時に、私と鎌田實先生が一緒に活動しているシンクタンクが経営として関わり、もともとあったいいものを活かしながら、医療や地域包括ケア的な要素を加えて、その地域にとって必要な機能を提供していこうというコンセプトで始まったものです。

○このような活動では、地域の方々を取りまとめていくコミュニティマネージャー的な中心的存在が必要かと思うのですが、それを藤井様が行っているのですか。

☞企画して開設するまでは、ほとんど私がやっていました。開設以降は、訪問看護ステーションの施設長をしている男性の看護師さんで、この地域がすごく好きで人が好き、というその方が、実質コミュニティマネージャー的な役割をしてくださっています。

③困難を抱える女性が安心して暮らせる六甲ウィメンズハウス事業

（代表提案者：認定 NPO 法人 女性と子ども支援センター ウィメンズネット・こうべ ／令和3年度・事業育成型 選定事業・令和4年度・事業者提案型 選定事業）

発表者 正井 禮子（認定 NPO 法人 女性と子ども支援センター ウィメンズネット・こうべ 代表理事）

●提案事業の概要

DV 等を受けている女性、シングルマザー、高齢女性、非正規雇用や低収入の女性、コロナ禍や物価高騰で経済的困難を抱える学生や留学生の多くは所持金も少なく、保証人もなく住居取得が困難である場合が多い。本提案の対象地では、こうした対象者の住宅確保が極めて困難な現状がある。本提案では、民間事業者の遊休不動産を提案者グループが無償で借り受けて改修し、多様な女性の住宅確保用配慮者のために支援員つきの住宅を整備する。困難を抱える女性、留学生、外国人の支援実績を持つ各団体が連携してサポートを行い、入居者に互助・共助や交流を促しながら、多様な女性がシェアするメリットを活かした運営を行う。

●事業実施報告のポイント

◇取組の背景・提案内容

○安心・安全な住まいの取得が困難な女性たち

○女性たちへ住まいの果たす役割

○実現しようとしている建物

＊多様な状況の女性が入居可能な約 19 ㎡～57 ㎡の7つの住戸バリエーション

↑事業実施報告のスライドはこちらをクリックして閲覧してください。

◇取組の成果、今後期待される効果

○より良い社会や仕組み作りに向けて大きな社会的インパクトが期待できる

＊困難を抱える女性の多世代居住のモデルの提示／民間事業者によるストック活用・リソース活用の新たな選択肢の提供／支援の妥当性、必要性／高齢化が進むオールドニュータウンの再生への寄与

◇今後の取組みの方向

○今後の課題　＊事業予算／家賃の低廉化／自立支援

●質疑応答概略

○DV 被害を受けた人や女性だけが集まっている場所の広報の仕方について、その判断基準について教えてください。モデル事業としての普及に努めることと相反することもあり、大変悩ましいと思うのですが。

☞自治会からも同じようにその質問はあり、ここがどのような場所なのかを説明しています。入居の際には面談をして、シェルターを出てある程度危険度の低い方や経済的に困窮している方に入っていただくようにしています。広報する際には、敷地内に交番があることや、経済的に困難を抱えるシングルマザーたちを支援する、ということを伝えるようにしています。それから、デンマークやアメリカでは、シェルターですら出入り自由で、コミュニティが守ってくれています。DV 被害を受けた人でも普通の暮らしをする権利、それがノーマライゼーションだと。やはり、加害者が間違っているのだから被害者はコミュニティや地域社会で守るという考え方。社会のあり様も変えていかないとなかなか難しいのだと思っています。

(2)クロストーク　三浦委員にコーディネートしていただき意見交換等を行いました。

三浦委員
（コーディネーター）

髙橋委員長

山田委員

株式会社ハピネスランズ
伊藤敬子氏

一般財団法人ひふみ会
藤井雅巳氏

認定 NPO 法人 女性と子ども支援センター
ウィメンズネット・こうべ　正井禮子氏（右）
合同会社人・まち・住まい研究所　浅見氏（左）

事業報告者

○大変充実したご報告ありがとうございました。私たちも審査をする時に、うまく日本のモデルになってほしいというものを一生懸命選んでいきます。こうして立派に活動されている報告をいただいて、非常に嬉しいと思った次第です。

○山田先生から、モデル事業の審査する側としての示唆に富む資料を用意していただいておりますので、まず全体にサジェッションという形でお話をお願いします。

［三浦委員］

① 話題提供～クロストークの補助線として　山田委員

○本日は、私が医療福祉建築を長く研究している観点から、建築の方面でも共有されてきた社会的な課題、あるいは皆様が取り組んでいるモデル事業をどう捉えているのかについて簡単な補助線になるような資料をお持ちしました。
○1点目は制度そのものがどんどん変わっていっているということ。2 点目はデザインの取り込みについて。3 点目は今までにないものをどうモデル化していくのかについて、話します。［山田委員］

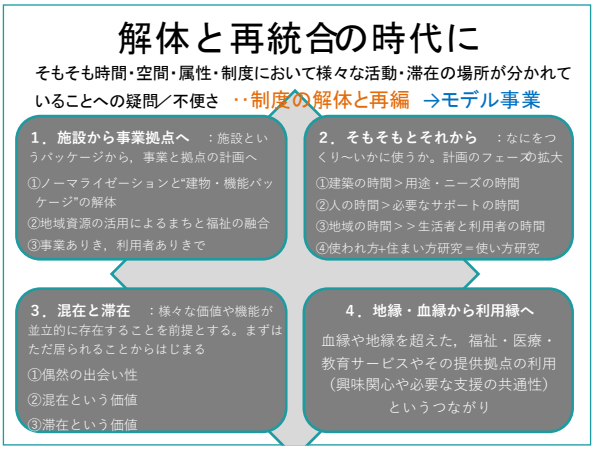
1．解体と再統合の時代に
–いまとは違うもの，ここにないもの，いま主流でないものが「次」をつくる

2．思想とデザインの相補性
–「フィルタ」としてのデザインによるアンコンシャス・バイアスへの働きかけ

3．「じゃない」と「組み合わせ」
–組み合わせが隙間を埋め，ハブをつくる

↑説明使用のスライドはこちらをクリックして閲覧してください。

●1. 解体と再統合の時代に



○介護保険黎明期から，いわゆる施設ありきで作られてきた特別養護老人ホームや介護老人保健施設といった福祉施設ですが，社会背景や人口分布が変わっていく中で事業実施の方法や担い手が変化してきました。その再編あるいは新しい制度への発展を，皆様のモデル事業提案から見出していこうというのが１つ大きな方針であると理解しています。

○本日ご報告の3プロジェクトのご紹介でも、まだ見たことない取り組みや，自分では認識していなかった課題から様々なものを学び，共有する機会となっています。皆さんは、”今・まだ・認識されていない”あるいは”支援がない”ないからこそ困っている方たちへの新たな支援やその方法のモデルをご提案いただいています。今主流ではないものが，これからのニーズを牽引していく可能性があります。

○私どもが提供しているサイトもまた皆様方の取り組みのような，ひとつの挑戦です。医療福祉をはじめ住まいや教育も含めた広義の福祉機能、人口縮退、超少子高齢化の時代の中で、地域コミュニティの維持，多様な支援の方法や拠点をどのように実践しているか、こういった様々な事業の事例を集めてご紹介しています。そうした拠点が医療や福祉機能の利用圏域を誘引することで、そういう施設や事業があるからそこに人がまだまだ住み続けることができるという状況も起きている。こんなことも含めて公共施設の様々なあり方を整理しています。

○一般の方にとっては、福祉など公共の担い手は自治体や国、という固定観念がまだまだ払拭できていない現実もあります。本日お集まりの皆様は、そうした民間（私：わたくし）が担う社会的な価値を持つ仕事のあり方、地域や私ごととしての福祉を考えていく機運を地域に作ってくださっています。

○＜公・共・私・個＞の役割分担，あるいは性格付け――と考えられているもの――を図示しました。＜公＞では，利用者は限定されないが行為はある程度限定されます。＜個＞では逆に，利用者が限定されるが行為

は限定されません。自宅でどう振る舞おうと，ご近所の迷惑にならない限りはですが，自由です。その中間である<共>では，利用者をある程度限定しながら，公の場所よりも自由な活動をすることができます。このグラデーションの中で、それぞれがそれぞれの特徴を活かしながら役割を担ってきました。私企業あるいは民間団体やその管轄になる場所<私>は，中間的制限の元に活動や互助的なコミュニティで人々をサポートし合うような関係を作ってきた、という理解できます。

○これらの役割分担や特徴も時代とともにまた移り変わり、<公、共、私、個>とはそういものだと考えられていた規範や特徴を飛び越えていく現象が起きています。例えばプライベート<私>が公共の役割を担うとか、個人的な財産<個>である私有地や建物を開いて地域の皆さんに供する，といった例は「<個／私>から<共>への相移転」と説明できます。このような「従前の領域の飛び越え」が，様々な場のあり方を可能にすると同時に，利用者や行為の可能性を増やしていく。今この時の主流や常識「じゃない」ものが，新しい進化を促しているということだといえます。

○規範となる制度というものはしばしば整然としていて，綺麗で理解はしやすい。けれども、世の中本当のところはもっといろいろなものごとが混沌としていて、だからこそ様々なニーズや事情をもつ人たちに声や手が届くというすがたをしていたはず。そのような，ある種の混沌や越境していく挑戦を含んだ多様なモデルを見つけ、それを応援することがこのモデル事業の一番大切なところかと思っています。

●2. 思想とデザインの相補性

○これは国交省のモデル事業でありますので、建物／まちとしてのデザイン性についても問いたい，より良いものにしていきたいという思想とは相性がいいでしょう。そうした「思想」は実現されるデザインとしてかたちになっていきます。一方で，実際につくられた「デザイン」もまた，意図せずとも思想を作っていってしまうことが大いにあります。

思想とデザインの相補性

思想がデザインとなり

電車では，なるべく多くの人に座って欲しい→ 人掛けのデザイン
こどもでも自立して身の回りのことをしたい→ 什器寸法への配慮
車と人のゾーンは分けたい→ 歩車分離
住民同士の交流を図りたい→ 生活の向き＆動線の交差
事故を防ぎたい→ ホームドア，一見不便なネジ止め‥

デザインが思想をつくります。

アンコンシャス・バイアスの再生産

○それはアンコンシャス・バイアスの再生産につながるということもあります。先ほどウィメンズネットさんのお話で「なぜ DV の被害者が隠れていなければいけないのか、その人たちが当たり前に暮らせばいいので加害者が悪い」という考え方は、そういうものを打ち砕いていく考え方です。被害者を隠すのが妥当でありそこに疑いがないというのは今私たちが持っているアンコンシャス・バイアスの 1 つの現れであり、少しずつ変えていかなければいけないことは確かでありながら、あらゆるデザインの隅々に今ある。そして「現実」として，すぐにそれを実現するのは難しいでしょう。社会のあらゆる隅々が，加害者を遠ざけ，罰し，加害を予防するようにはつくられていない――被害者が逃げればいい，でつくられている――からです。それでも，今私たちが当たり前だと考えていることは，本当にそうなのかな、という疑いを持ち続けることも，社会のアップデートのためには大切な視点でしょう。

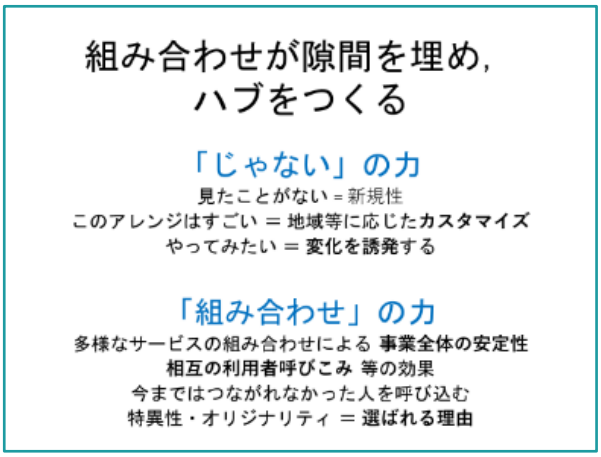
○例えばこのモデル事業で実際に建物など事業の実施場所をつくっていく時に、”福祉”なのだからデザイン性は二の次でよい，としてしまうと、”福祉”にはそういう扱いをして良い，程度が低いままでよいのだというメッセージを発してしまうことになります。このモデル事業で選定された皆様がつくっているものは、建築的にも空間的にも優しく美しく素敵で、こうしたアンコンシャス・バイアスを再生産するようなものではない，そのこともとても大切だと感じています。

○このように，いわゆる”福祉らしさ”のようなバイアスをどう解除していくということも大事ですから、そのような観点からもデザイン性をぜひ事業の中に取り込んでいただきたい思っています。またデザインがある種の”フィルタ”となることで、そのデザインに共感する人たちを呼び込み、その場を守る価値や意欲も生まれていく。デザインは盾にもなり武器にもなり自分たちを守るためのものでもあると思います。

○このモデル事業で非常に重要なのは運営までを含めて評価しているところだと思います。建物をつくりました，で終わらず、その場所をどう運営していくか、その運営はどのような方がどのような考え方で担うのか。この運営と評価の継続性が大事で、この場所をどう作るか、マネジメントし続ける主のような方たちがこのモデル事業の中で非常に大きな役割を担っていることが大事だと思っています。

○デザインの配慮によってその場所へのフィルタ性や価値を高め、街にも価値を与えることができます。こうしたことを皆さん実践していただいていますので、ぜひ広報していただければ嬉しいです。

3.「じゃない」と「組み合わせ」



○本日のご報告の大きな特徴が、「組み合わせ」と新規性です。今までにあった○○「じゃない」何か、多様なサービスの「組み合わせ」によって事業全体の安定性や新しい利用者層の呼び込みを実現できているということだと思います。

○ハピネスランズさんでは、「付加価値」や「既存の状況への閉塞感」が人との新しい関係に結びついていく点が非常に大事だと思いました。MV 小野路宿さんでは、「選択肢」や「複合化の間接的な効果」が大切なキーワードで、病院のバックアップ施設としながら訪問看護ステーション、カフェ、コミュニティスペースを、お互いに効果を高め合う事業の組み合わせとして運営されていて、1つの事業ではできないことが複数の事業の組み合わせによって実現できている。このような点もモデル事業として非常に注目すべき点だと思います。ウィメンズハウスさんでは、「個人ベースではなくて互助居住」だとか、「単なるケア付きの住宅ではない」という新規性の部分についても非常に学ぶところがありました。

○以上、この後のクロストークの補助線という形でお持ちしました。ありがとうございました。

○山田先生ありがとうございました。今までの要素としてはあるけれども、それぞれを新しく組み合わせてアレンジすることで隙間を埋めて、かつデザインによるフィルタが今までにつながれなかった人を呼び込んで地域を変えていくというモデル事業の趣旨であるとか、本日ご報告いただいた 3 事例に共通する部分をまとめていただいたと思います。事例紹介含め、ありがとうございました。　［三浦委員］

②クロストークで議論したい2つのテーマ

○1番は、ご報告の中で、ほかの地域でもできるというお話もありましたが、どういう地域で、どういう人や地域資源、デザインがあればいいのかについて。

○2番は、継続性としての組み立て方の考え方について。これは審査側の視点ですが、応募申請される提案書の中で、10 年間継続して普及させるモデル事業としての考え方や工夫点をしっかり書いていただけると、我々も安心して評価を高められるわけです。そのため、特に事業の安定性として、一つは経営面の意識や経費の考え方や工夫について。

○以上この 1 番と 2 番について、事業主体別に、もう一度深堀りいただけたらと思います。

［三浦委員］

●多世代で暮らすことが、シェアハウス事業のプラスに働いている

○ハピネスランズ・伊藤様。実は私、このマネジメント、申請書には理想を描けても、実践には非常に複雑なオペレーションが必要で、途中でギブアップされてしまうのでは思い、辛めの評価をしていましたが、それを反省させられる魅力的な実践報告でした。改めて事業の継続性確保の上でのポイントあるいは普及の可能性について、お話しいただけないでしょうか。 ［三浦委員］

○事業開始して 3 年目ですが、スタートアップが大変だという覚悟を持って開始しました。ボランタリーな気持ちで続けられる部分には限界があるので、10 年間さらに 15 とか 20 年とかやっていくためにどうすれば良いのか、その仕組みを作っていこうというのが、社内的にも、今一番の課題です。

○初めはやるつもりはなかった訪問介護事業所は、2 年目から開始していますが、そこがやはり経営的には少し黒字を増やしてくれた部分だと思っています。

○大変ですが、確実に思ったよりもうまくいったと思うのが、高齢者と子供の相性の良さだと思います。我々現役世代はものすごく時間に追われて生活していますが、高齢者も子供も自分たちの時間、ちょっとゆっくりした時間を生きているんですよね。長い人生の中で高齢者の老い方って、もう全く子供が成長していくことの逆のような状態になるのです。ですから、やはりそれを高齢者も、ああそうか、小さい時にはこんな感動があったんだなとか、多分気づかされるんですよね。

○更に、我々世話する側も高齢者だけだとすごく辛くなってしまう。ところが、子供がちょっといることで改善される。そこが本来だったら介護事業者では採用できない人たちを採用できてるということでしょうか。ひふみ会さんのお話にもあったように「人を採用できてるところが一番、事業安定性としては価値があった」ということだと思っています。 ［伊藤氏］

○もう 1 つ教えていただけますか。高齢者や介護が必要な方の中に若い人やお子さんが入ってきて、そこをうまくマネジメントするために、資料の中では多世代の交わりを仕掛けながらコミュニティを作っていると拝見しました。一般的にそこが、真似しにくい難しい点だと思うのですが。 ［三浦委員］

○すごく難しいですけれども、基本的にはだから今の距離感がちょうどいいのかなと思いますね。月 1 回のお誕生日会と、あとちょっとすれ違い程度に、食事の時間が高齢者は 6 時からで若者は 6 時半とか 7 時からで、その程度ずれてるところがまたちょうどいいのだと思います。やはりずっとお互いに気を遣いながらいるのだとうまくいかないと思います。家族でも基本的に舅姑問題って古典的な課題じゃないですか。それを他人同士でやるわけだからものすごい大変ですが、距離があり他人だからこそ許せるというところをどうやってマネジメントするのかということだと思います。多世代のシェアハウスは絶対スタッフがいないと成り立たないと思います。多世代でもうまくいっているという事例も聞きますが、よく聞いてみると、うちほど多世代構成ではないですね。 ［藤井氏］

●地域を巻き込み、色々な主体が関われる仕掛けづくりが、事業の持続可能性に繋がる

○ヨリドコ小野路宿の藤井様。医療法人で訪問介護を運営しているところはたくさんありますが、他でもこれができるのかどうか。経営的な部分とか費用の部分はどのような考えがあればできるのか、また、ほかの部分で安定性確保のための工夫点など、補足があれば教えてください。 ［三浦委員］

○他でもできるのかという質問に対しては、できるのではないかと思っています。ただ、やはり特に医療従事者は資格を持ち手に職があることで、なんとなく自分の世界や壁を作ってしまう傾向がある方が比較的多い印象なので、そのような思考のある方はちょっと難しいと思います。むしろ病院に来ていない将来的な患者さんの健康増進をどうするかなど、普通の病院経営からすると見方によってはマイナスになってしまうようなところに、ちゃんと価値を置けるかどうかという、何かのような意識があれば絶対できるのではないかと思います。

○2 つ目の持続可能性については、実は途中段階ですごく大きく見直したことがありました。やはり初めの段階で、この施設単体で収益的にはトントンになるぐらいのところを目標に色々と緻密に事業計画を立てて取り組んでいたのですが、途中で気づいたのは、そんなにはやりきれないということ。人件費とか時間外労働だかとか、成り立たなくなるので、細かく管理することを 1 回諦めたのです。

○そうすると、実は色々課題とか整備すべき問題が見えてきたのです。当時、裏山の竹林はボーボーで、庭もすごい水浸しでだったところ、なんとなくそれを解決したい、この場をもっともっと良くするために一緒に関わりたいという、なんとなく僕らが集めたボランティアとかじゃなくて、何かここでやっていることが面白そうでこの場所が好きだから、それを自分たちで一緒に解決したいという方が現れて、その方々がいろんな地域の方を巻き込んでいくという、そんな現象が起きたのです。

○振り返ってみれば、あまり管理しないとか、余白を作るとか、それによって関わりしろのみたいなものをうまく見出せたのかなと感じるところでして、一度行き詰まりかけて、そこで大きくその発想を変えたという、そんな経緯があります。 ［藤井氏］

○ありがとうございました。びっしりと埋まったスケジュールを見ると、逆転の発想でこうした伸びやかな活動が出てきている点は非常に示唆深いなと思いました。 ［三浦委員］

●困難を抱える入居者の住まいを地域に開くことで、支え合える仕組みをつくりたい

○神戸のウィメンズネットの皆様。これから始めるスタートラインです。今後のことも含めて、活動の普及可能性、支援員さんのお給料を持続的に捻出するための工夫などの展望があればぜひ教えてください。

［三浦委員］

○運営について、ウィメンズネットさんの希望で皆さんと一緒に考えたことは、地域のおじさんやおばさんたちが施設の中に昼間は自由に出入りできるという形をとりたいと。もちろんプライベートゾーンには入れませんが、建物の中のパブリックゾーンはみんなが出入りできている状態を作りたいと。

○しかし、自治会のおじさんたちは総論賛成で何とか若い者が来てくれるならいいか程度のつもりでいるのですが、各論に落とし込んでいった時に本当にどうやって地域との関係を形成していくのかという話になるとやはり意外とアプローチが難しいので、お一人お一人が建物に上がってきてくださって、住んでる人たちと交流したい人は交流できるみたいな建て付けにするのがいいのかな、ということを考えていました。おじいちゃん、おばあちゃんと関わりたいんですよね。［浅見氏］

○　事前にヒアリングしたシングルマザーたちから、「週 1 回でもいいから家事支援してもらって残業ができるようにしたい」というような要望はすごくあるので、本当に大勢いるおばあちゃんとかおじいちゃんに参加してもらい、おじいちゃんには保育所に迎えに行ってもらって、おばあちゃんたちにご飯を作ってもらって、子供たちと親しくなってもらったら地域が支えてくれるようになるのではと思ったりしています。

私は地域がそこを支えてくれている、コミュニティが守ってくれている、その中に子供たちもいるというふうなものを作りたいと思っています。そしてお金の件はサポーター制度みたいなものを作って、1000 円で 1000 人集めよう、それも親しくなれば地域のおじいちゃんやおばあちゃんが支えてくれるかもしれないなどと甘いことを考えております。［正井氏］

○この事業の優位性はどこにあるかというと、コープこうべさんが建屋を無償提供してくださったので、建物取得に一切お金がかかってないことです。ただ 30 年放置されていた建物なので手を加えるべきところは山ほどあり、莫大なリフォーム費用は見込んでいますが、取得費がかからないというのは採算上有利なので、結構あると思われる休眠遊地を企業さんが活用するとか、やる気になりさえすれば、他でも展開できるのではと思っています。

○この事業では、賃貸住宅業だと思えば運営できるし、改修費用を回収することも可能だと思いますが、やはり問題になるのはケアのための人件費のこと。一人分は何とかなるとしても二人目からは厳しい。ここに、サポーター制度として、心ある人たち 1000 人が 1000 円ずつ出してくれたらとりあえず 1 年間 100 万になるだろう、と考えています。［浅見氏］

○ご報告の皆様、ありがとうございました。最後に、山田委員と髙橋委員長から一言ずついただきます。

［三浦委員］

② 本日のまとめにかえて

○非常に興味深いお話をありがとうございました。画面の向こうの皆様がニコニコ頷きながら参加してくださっていて、良い印象の会になったと感じます。大変なこともたくさんあるかと思いますが、ご苦労も含めて誇りを持ちながら、楽しそうに事業運営なさっている様子が伺えたことが一番印象深かったです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。［山田委員］

●様々なものを横刺しして繋げる 「ごちゃまぜ」は新しいデザイン

○3 つの事業報告をありがとうございました。私にとって、いずれの対象地域とも、土地勘や地縁があり、土地柄を懐かしみながら伺っていました。「ハピネスランズ」は、自由が丘の土地柄とぴったりくるものがあり、「ひふみ会」は、町田で当時先駆的な療育園の業績があり、取組の背景が納得できました。さらに建物無償提供の「コープこうべ」は、実に地域に根ざした活動していると感じました。3つの事業報告から、横串を指して、繋いでいくこと目指したデザインだと思いました。

○「横」という字は、「横槍」「横恋慕」「横車」等、あまり良い言葉はありませんが、「横」にすることは、今までになかったものを作り出すこと意味することでもあります。私の専門である社会科学の分野で著名なシュンペーターという、資本主義の運命を考えた人の言葉を引用すれば、「イノベーション」だと思います。「イノベーション」とは、新しいものを組み合わせること（新結合）で、各提案事業ともそうした取り組みを行っているのだと思いました。

住宅は、人の住む器です。そこで展開される様々な人の生活には、それぞれ抱えている生活課題、社会福祉法でいう「地域生活課題」があります。それら課題に対する器としての「住まい」は、施設と住宅の制度上の縦割りの溝を埋め、横刺しを指し繋げる必要があり、このモデル事業は、そうした取組を世に広めているのだと改めて感じました。

○横串を指しながら、子どもから大人までの出会いがあり、交流やコミュニティを育む工夫がある。そういう意味で、これら提案は「ごちゃまぜなデザイン」と言っていいかもしれません。今までの古い人の発想は、「ごちゃまぜ」は混乱だという考えでしたが、むしろ新しいデザインだということです。

○このような事業を当モデル事業で展開できていること、この枠をもっと自由に使えるようにお願いしたいところです。［髙橋委員長］

3．閉会

皆様、本日はお忙しい中、ご参加いただきまして誠にありがとうございました。
また、登壇いただきました先生方、事業者の皆様、大変貴重なお話をいただきありがとうございました。
事業者交流会は皆様のご意見を伺いながら、より意義のある会にしていきたいと思います。
また閉会後、本日参加者同士の連絡先を交換できる時間を 15 分程度設けておりますので、チャットメールをご活用いただきながらご連絡の交換をいただければと思います。
それでは、これをもちまして事業者交流会を閉会させていただきます。